

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：25405

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370523

研究課題名(和文) 中国地方方言における伝播の整流と偏流

研究課題名(英文) Straitening and stagnation: About propagatetion of Chugoku district dialect

研究代表者

灰谷 謙二 (HAITANI, KENJI)

尾道市立大学・芸術文化学部・教授

研究者番号：60279065

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：中国地方方言は、西日本方言の広がりにおいてそれを促進する役目をもつのか、妨げ停滞させる役目をもつのか。たとえば断定辞は中世のデアからチャ・ジャをへてヤへ変化する流れがあり、それは現在の方言分布状況と一致する。この流れで中国地方はジャからヤへ移行するかとみると、九州がその動きを速く見せるのに比して、ここではそれが遅い。そのような変化と伝播の「淀み」の成因を明らかにし、ひいては日本語方言状況の成立において中国地方方言がどのように位置付けられるかを明らかにすることの基礎研究たらしめ、東西・南北・円環のうち東西山間部・沿岸部の2経路においてどのような伝播の速度差があるかを追跡した。

研究成果の概要(英文)：How work Chugoku district dialect to propagate West japan dialect? Straiten and smooth or stagnate and interrupt? For Example Japanese copula changed from "dearu" to "ya" through gya / zya. It is according to present condition of Japanese dialect. For this flow, will "zya" change to "ya" in Chugoku district dialect? In Kyushu district the movement seems smooth and quick, but here it seems slow and stagnated. We incubate to make basic research for figure out that what is account for this dead flow. In addition, how it is ordered in Japanese dialect conclusion. For the first step, we researched the gap of the speed of the dialect change and propagation in two routs that through Chugoku Mountains, and Seto inland sea.

研究分野：方言学

キーワード：中国地方方言 伝播 偏流 日本語方言の成立過程

1. 研究開始当初の背景

中国地方方言の変化メカニズムについては神鳥が備南から山陽筋を西進、山口で折り返し山陰を東進し、出雲へ吹きだまりそこからまた拡がっていくような、螺旋階段を時計回りにのぼっていくモデルイメージを示している。「山口で折り返す」という現象が事実であるとすればこの背景はどう説明するものか、なぜ九州にこの動きが渡らないのかが問題となる。このことを考えるには東西方向の動きだけでなく、南北方向の動きを考慮する必要がある。岡田1_9_8_0は東経1_3_3度線上の高知から隠岐までの1_1地点における打消し過去表現の状況から、中国山地山陰側と、四国山地太平洋側に古態層のザッタ・ダッタが、中国山地南斜面山陽側と瀬戸内・四国北面に新層のナンダ・ンカッタが分布する様を描いた。これはつまりここで明らかにしようとする整流の中国地域中央部と偏流をつくる外延部の関係を輪切りにした状態であると予想される。

経路性に着目した西日本方言のグロットグラム調査は、都染2011や馬瀬1995、真田(阪大)1993など、多くが東西軸でなされており、南北軸のものは、四国を対象とした高橋1986、「しまなみ架橋による地域方言の変化」科研代表高橋H14~H16などがあげられるにとどまる。特に山陰から四国へという広域を視野にいたたものは管見に入らない。

このような視点でみた中国地方方言の姿は、瀬戸内海方言の著しい改新性や、中国山地・四国山地の古態保守性をもつ大きな一貫したシステムとしてとらえ直される。同時に山陰や高知の中四国における独自性とともその成立背景も解明されることが期待されよう。

日本語の成立過程を、方言分派のメカニズムの角度から解明する諸研究の成果と

比較・連携されることで、西日本ことに中国地方方言の日本語方言上の位置付けを明らかにする役割を担うものである。

2. 研究の目的

本研究は、中国地方方言に、方言の伝播・言語改新に対する「素直な流れ=整流」と「淀んだ流れ=偏流」の二つの方向があることを明らかにする。関西から九州へ、九州から関西への伝播経路が、中国地方においてとどめられ、変化が飽和(均衡)状態をみせる現象をとらえ、その「淀み」の成因を明らかにしようとするものである。

中国地方方言は、関西と九州の中間に位置し、西日本における言語伝播の通路となる位置にある。しかし、関西に起こり、当然中国地方にもおこるであろう変化がみられず、古い姿を留めるとい現象が認められる。たとえば関西方言の断定辞はジャからヤへ変化しそれは周縁の中国地方に伝播することが期待・予想される。しかし岡山・兵庫県境を境にその変化を拒否するように中国地方はジャを維持する。飛び越えて九州にはヤが発生しそれは中国地方へは伝播しない。このような期待される変化=整流に対する中国地方方言にみられる言語伝播の“淀み”を“偏流”と捉える。この偏流がどのようなメカニズムで発生し、飽和(均衡)的状況をみせるのか、そこにはどのような意識と社会的背景が関与しているのかを明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

1)まず、東西・南北軸で、広域的・狭域的に「伝播」現象として認めうる言語項目を抽出し、「伝播が形作る方言分布状況」の整理をおこなう。

2)共同研究者のそれぞれの課題意識に添い音声音韻項目、文法項目、語彙項目の

それぞれの分野で先行研究の成果から読み取れる「整流」と「偏流」を峻別する。3)偏流がどういう部分にどのようにして発生し、それがどのような中国地域方言の特異性を形成しているか、このような言語的な偏流や伝播モデルは人の移動とどのように関わるか、その相関はどのように確かめられるのかについての理論的整理を行う。

研究期間は3年とし、1年目は中国道ルートを中心とした調査研究、2年目は山陽道ルートを中心とした調査研究によって、中国地方陸地部における偏流と整流の関係をとらえる。3年目はその外側の瀬戸内海、山陰と四国太平洋岸との関係を将来的課題として視野にいれつつ「中国地方方言の整流と偏流」の記述とメカニズムについての解釈を行い、方言伝播と方言分布形成過程についての他地域の研究との比較にむけた総括・整理をおこなう。西日本方言の方言分布とその伝播ネットワークの中での中国地方方言の位置付けをおこなう。

調査は、各地点生え抜き3世代のインフォーマントを対象とし、重要地点では移住経験者の調査も行う。

4. 研究成果

調査の過程でつくられた調査票そのものが当該地域の言語伝播を確認するための指標として機能するか否かが重要な課題となった。調査自体は中国地方山間部ルート、岡山新見、広島三次、山口美祢の拠点調査段階で終わったため、期待した視点からの結論を導くにはいたらなかったが、調査過程で作られた調査票は当該地域の伝播現象を把握する重要な指標として整理し得たことは大きな成果であった。

『中国地方五県言語地図』『瀬戸内海言語図巻』『日本言語地図』『方言文法全国地図』

をもちいた当該地域での分布対立を確認できる項目の洗い出しと、各研究者の研究蓄積から導かれた伝播指標は、すでに行われた調査データとあわせてさらに精緻なものに修正されながら西日本全域の伝播のありかたを整理する重要なリストとなり得るものとなった。

共通項目：表現法

「来なかった」 コナンダ、コザッタ、コンカッタなど **「行かねばならない」** イカニャーナラン、イカニャーイケン、イカンニャーヤレン、イカンニャーイケン、イカントイケンなど **「ください」** ミテオクレー、ミテオクレー、ミテツカーサイ、ミテツカイ、ミテミンサイ、ミテミンチャイ、ミチャンサイなど **「ありがとうございました」** アリガトーゴザンシタ、アリガトーチンシタ、アリガトーチンシタ、アリガトーチンシタ、アリガトーチンシタ、アリガトーチンシタなど **「～していらん」の有無**

共通項目：音声

(1) ai 連母音 (大根 (ダイコン / デーコン / デコン)) (2) 合拗音残存西瓜 (スイカ / シーカ) (3) s/h 交替 7月 (シチガツ / ヒチガツ) (4) 「遠い」 (トーイ / トーイー / トイー / トーエー)。 (5) を格融合 (テガミオ / テガミュー / テガミョー / テガミー) (6) 形容詞連用形ウ音便 (タコーナイ / タコーネー / タコーナー / タコーネアー (タカーナイ / タカーネー / タカーナー / タカーネアー))

文法・音声

(1) 形容詞連用形 (ト[ウ]オーナル / トーナル / トイーナル / トエーナル / トーエナル) (2) 八行四段連用形 (カッタ / コータ / コタ) (3) 「きのう手紙を出した」と言うときの「出した」はどうか。(FPJD G005) (ダシタ / データ / ダイタ / ダエータ) (4) サ行四段連用形 (カシタ / ケータ / カイ

タ/カヒタ) (5) (6)マ・バ行四段動詞音便
(トンダ/トーダ/トダ) (ノンダ/ノーダ
/ノダ) (7)促音便(8)促音便(9)イ音便 (コ
イダ/ケーダ) (10) (11)ナ変連用形 (シン
ダ)

共通項目：文法

(1) 断定辞+告知：先生デ・ゾ・ゼ，
先生ダ・ジャ・ヤ，先生ダ・ジャ・ヤ+
ヨ等(2)断定辞+た～ダッタ・ジャッタ・ヤ
ッタ(3)意志系ミュー，ミョー(4)回想イッタ
ノー，イッタナー，イッタネー (5)敬語形
式+原因理由コラレル，キンサル，キテジ
ヤ，キテヤ，キ：「から」 ケー，ケン

(6)能力可能「カカラレン」「カカラレル」
・語彙項目

1 祭りの前夜(ウラマツリ、ヨイ、ヨゴ
ロ、ヨド) 2 こむらがえり(コブラアガ
リ、コブラガエリ、ヒルマガ アガル) 3
あざ(ホヤケ) 4 よだれ(ツー) 5 馬
鹿者(アンゴー、サイダイジ、ハチモン、
テンポーセン、トーハチ) 6 腕白小僧(シ
オカラ、ワルゴ、ガキ、ガンボ、ジラゴ、
ワルサゴ) 7 おてんば(ハチマン、ピン
ピラ) 8 内弁慶な人(ウチスバリ、ウチ
クスベ、ウチガッタク、ヨコザベンケー)
9 つばめ(ヒーゴ、ツバクロ) 10 ふく
ろう(ヨズク、フルツク、ゴロクト) 11 こ
おろぎ(キリゴ、クロツズ) 12 赤とんぼ
(ショーリョートンボ、オドリトンボ、ボ
ントンボ) 13 かたつむり(マイマイ、デ
ンデンムシ) 14 さなぎ(ビビ、ムツゴ)
15 まむし(ハミ系の分布) 16 いたどり
(サイシンコー、サジッポー、タンポコ、
カップ) 17 どくだみ(ガングサ、イヌノ
カケバリ、ジュージャク、ニュードグサ)
18 とうもろこし(ナンバ、キビ、トート
ーコ、マンマン、トーキビ) 19 かぼちゃ(ポ
ーフラ、ナンキン、トーナス)

20 きのこ(ナバ、タケ) 21 平らな(ナ
ルイ、ロクナ) 22 つらら(カナコーリ、
シンザイ、ナンジョー、スマル) 23 すり
こぎ(レンギ、メグリ) 24 たわし(ソー
ラ) 25 分家(ワカリヤ、デイエ、シンタ
ク、シンヤ) 26 午後の間食(コビル、ハ
シマ、チャ) 27 咳(ガイキ、タグリ、コ
ツ) 28 おはじき(ヤサラ、イジャラ) 29
凧(イカ、ヨーズ) 30 賢い(リコーナ、
ハツメーナ、エライ、イズイ) 31 恐ろし
い(キョートイ、イビセー) 32 ながる(ハ
ツル、シバク、ブシャゲル、ニヤス、テベ
ス) 33 化膿して膿んで腫れる(イバル、
ウバル、ウズク、ズクバレル) 34 大声で
叫ぶ(ドナル、オラブ、タゲル) 35 送っ
てよこす(オゴス、クレル) 36 うらやむ
(ケナリガル、イカメガル、ソネム) 37 カ
む(ヘバル、ケズム、イキズム、キバル)
38 倒れる(コケル、マクレル) 39 うた
た寝を「ソソネ」と言うか 40 垢を「コ
ケ」と言うか 41 かまどを「クド」と言う
か 42 水瓶を「ハンドー」と言うか
43 目が覚めることを「オドロク」と言う
か 44 「キッポ(-)」の意味(その他)
自転車の補助輪 コマ・コロ ランドセル
を背負うの九州からの東進状況、ゴミを捨
てる ホールの西進ダカラ・カラ ヘージ
ャケー

岩城裕之は岩城 2016 において、三次市
吉舎方言の数量副詞語彙の体系と動態を
分析し、先行論の分布から、広島からの勢
いの強さと旧語形の分布縮小傾向をとり
あげ、伝播の方向性について関西的なも
のの西進をさまたげるような地方中核と
しとしての広島からの流れについて言及
した。当該地域の伝播の偏流の一因となる
方言間の勢力関係が見通された成果であ
った。

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

岩城裕之 2016「広島県三次市吉舎方言における数量副詞語彙の体系と動態」『高知大学教育学部研究報告』第 76 号

[学会発表](なし)

[図書](なし)

[産業財産権]

該当なし

[その他]

ホームページ等なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

灰谷謙二 (KENJI HAITANI)

尾道市立大学・芸術文化学部・教授

研究者番号：60279065

(2)研究分担者

友定賢治 (KENJI TOMOSADA)

県立広島大学保健福祉学部名誉教授

研究者番号：80101632

小西いずみ (KONISHI IZUMI)

広島大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60315736

岩城裕之 (IWAKI HIROYUKI)

高知大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：80390441

有元光彦 (MITSUHIKO ARIMOTO)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：90232074

(3)連携研究者

なし